

西部病院心臓血管外科の歴史と診療内容のご紹介

心臓血管外科部長 小林俊也

聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院は昭和62年(1987年)5月25日に開院し、心臓血管外科は開院当初より胸部・心臓血管外科として開設され、診療を行ってきました。初代部長は稗方富蔵先生、平成12年(2000年)から舟木成樹先生、平成18年(2006年)から阿部裕之先生、そして平成23年(2011年)から私が部長に就任しております。胸部外科という範疇には心臓血管外科の他に呼吸器外科や食道外科も含まれますが、当科は心臓血管外科手術に特化しているため、2011年より診療科名を心臓血管外科としています。

当科で扱う疾患としては、虚血性心疾患、心臓弁膜症、大動脈疾患、末梢血管疾患が主な対象となります。虚血性心疾患は心筋を栄養する冠動脈に狭窄・閉塞が起こり、狭心症や心筋梗塞を発症して心不全にも至る疾患です。治療には薬物治療、カテーテル治療、外科手術が重症度に応じて選択されますが、薬物治療とカテーテル治療は循環器内科で行なわれ、外科手術が我々心臓血管外科で行なわれます。冠血行再建術である冠動脈バイパス術、急性心筋梗塞の合併症(心破裂、心室中隔穿孔、乳頭筋断裂)に対する手術、および虚血性心筋症に対する手術が我々の担当となります。診断の為には循環器内科での心臓カテーテル検査が必要であり、治療方針の決定に関しては常に循環器内科医と心臓血管外科医とで密接に連携を取って行なっています。

心臓弁膜症は心臓の弁の狭窄症ないし閉鎖不全症による血流障害のため弁機能不全となり、心不全を来す疾患です。軽症であれば内科的治療による心不全の改善・予防が期待できますが、重症の場合は外科治療により弁そのものの病変を治す必要があります。手術には弁置換術と弁形成術がありますが、大動脈弁疾患に対しては主に弁置換術が行なわれ、僧帽弁疾患や三尖弁疾患に対しては主に弁形成術が行なわれます。診断の為には心臓超音波検査が重要で

あり、心雜音を聴取した場合には積極的に心臓超音波検査を行なって評価することが肝要です。

大動脈疾患は胸部～腹部大動脈に発生する大動脈瘤と大動脈解離が主な疾患となります。大動脈瘤は破裂すると致死的となります。それまでは症状がほとんど無いのが特徴であり、検診や他疾患精査のために行なったCT検査や超音波検査で発見されることが多いです。手術適応は動脈瘤の部位、大きさ、形態により異なっており、動脈瘤を発見した場合には一度当科へご紹介いただければ、手術適応の評価とフォローアップ予定を立てさせていただきます。大動脈解離は慢性のものでは上記大動脈瘤と同様の対処になりますが、急性解離の場合には緊急手術が必要となる場合があり、当科並びに救命救急センターへの連絡をお願いします。手術に関しては、開胸・開腹手術とともにステントグラフト治療も行なっています。

末梢血管疾患には動脈閉塞性疾患と下肢静脈瘤があります。動脈閉塞性疾患の主な症状は間欠性跛行であり、治療には薬物治療、カテーテル治療、外科手術がありますが、放射線科や循環器内科とも連携して加療を行なっています。下肢静脈瘤に対しては有症状のものを手術適応としており、カテーテル(ラジオ波)による血管内治療も行なっています。

当院は地域の中核病院として近隣の先生方との連携を大事にし、安全で確実な手術を行なうことで、心臓血管外科手術の必要な患者さんに対してより良い医療を提供できるよう日夜努めています。外来日は月、水、金曜日となります。緊急の場合には電話でお問い合わせ下さい。ぜひとも先生方からのご紹介を賜りますようよろしくお願い申し上げます。



NETWORK



聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院

〒241-0811 横浜市旭区矢指町1197-1 TEL.045-366-1111(代) https://seibu.marianna-u.ac.jp/

vol.27

2022.05

開院35周年を迎えて

学校法人 聖マリアンナ医科大学
理事長 明石勝也

昭和62年によこはま21世紀プランの一環として開設致しました横浜市西部病院も、本年で開院35周年を迎えることができました。これもひとえに横浜市ならびにご支援を頂いている近隣医療機関のお力添えあってのことであり、心から御礼と感謝を申し上げます。

昭和47年に開学致しました本学は、それまで大学の母体となりました東横病院(川崎市中原区)と大学附属病院(川崎市宮前区)の2病院体制で運営されておりました。西部病院は本学としましては初めて地域中核機能を担う附属病院の開設でしたので、スタッフの確保、配置から運営まで様々な困難もありましたが、昨年で大学も創立50周年を迎え、西部病院の運営も安定させることができます。

西部病院の周辺は市街化調整区域が多く、緑豊かな癒しの環境は開院当初から変わらず、患者さんや働くスタッフには大変好評ですが、流入人口の増加に比べ高齢化の進行が速い地域というのも事実であります。実際にこの数年で外来、入院ともに高齢患者数の増加が顕著になっています。これまで周産期センター、救命救急センター等を配置し、高度医療の提供も可能な地域中核病院として歩んでまいりましたが、今後はより一層地域のニーズに合致した診療機能へ向けて、少しづつ修正を加えて行きたいと考えております。

もちろん地域医療構想においては急性期医療こそが我々の役割と心得て

おりますが、総合診療機能を強化し、救急医療との深い連携で複数疾患を持つ高齢者にも柔軟に対応できるようにするとともに、専門診療もレベルアップのための見直しを行ってまいります。他にも地域のご要望をお寄せいただければ大学としてもお応えできるよう最善の努力をさせていただく所存です。

35年を経ましたが、当時の横浜21世紀プランは人口300万人を超えた横浜市が地域を中心とした新たな都市計画を打ち立てたものです。西部病院も地域中核病院としての新しい原点をこれからも目指して参ります。ご期待ください。



病院長のご挨拶

開院から35周年— 「選ばれる病院である、あり続ける」ために

病院長 原口直樹



聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院は昭和62年に診療を開始し、翌63年に518床でフルオープンいたしました。今年で35周年を迎えます。皆様の温かいご支援のおかげで、地域医療における中心的な急性期総合病院として発展してまいりました。心より感謝申し上げます。

当院は大学の附属病院であると同時に、横浜市の地域中核病院です。すなわち「大学病院ならではの高度な医療を提供すること」と「地域医療のニーズに応え、地域に貢献すること」の両立が求められています。これに応えるために当院では、25の診療科に加え、心臓血管センター、救命救急センター、周産期センター、こどもセンター、足の外科センターを設置しており、それぞれの分野に特化した包括的な医療を行ってまいりました。さらに神奈川県の三次救急医療機関であり、災害拠点病院、地域周産期母子センター、地域医療支援病院などの役割を担っております。

新型コロナウイルス感染症はいまだに収束が見えない状況であり、各医療機関はその予防と治療を行なながら、通常の医療を進めていく時代になってきました。当院では入院時のスクリーニングの徹底など、しばら

くはご不便をおかけしますが、どうかご理解下さいますようお願い致します。また長期的にも少子高齢化とともに医療をとりまく環境は大きく変化しており、私たちもその変化に柔軟に対応していく必要があります。今後も地域医療の中核的な役割を果たしていくためには、たゆまぬ自己変革が必要であり、「選ばれる病院である、あり続ける」ため、当院自らの存在価値をより一層高める努力をしてまいります。

これまで築いてまいりした伝統と信頼を引き継ぎ、これからも「この病院で治療を受けてよかったです」と地域の皆様に思って頂けるよう、また医療機関の方々には「西部病院に患者さんを依頼して間違ひなかった」と感じて頂けるよう、職員一丸となり診療に取り組んでまいります。どうぞ宜しくお願い申し上げます。



患者支援センター センター長就任のご挨拶

地域中核病院・地域医療支援病院としての役割を果たせるような診療体制へ

副院長／患者支援センター センター長
消化器・一般外科部長
内藤正規



2021年4月に聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院消化器・一般外科部長として赴任し、2022年4月1日付で患者支援センター長（副院長・手術部長兼務）を拝命いたしました。私は、1996年に北里大学医学部外科学教室に入局し、以降札幌東徳洲会病院や北里大学メディカルセンターなどへの出向や、北海道大学大学院などを経て、当院の一員となりました。前職の北里大学メディカルセンターでは、消化器外科部長および感染管理室長として、近隣の医療機関と密接な連携をとることの重要性を経験しました。

当院は高度な医療の提供と人間性豊かな医療人の育成を担う医科大学病院であるとともに、横浜市西部地区の地域中核病院、災害拠点病院、地域医療支援病院としての役割を果たすことが強く期待されております。しかしながら、地域中核病院、地域医療支援病院として、近隣医療機関や地域住民からの十分な信頼を得ているとはお世辞にも言えません。

患者支援センターは、「入退院支援・管理」、「患者・医療・福祉相談」、「地域医療連携」の3部門から構成されており、医師・看護師・ソーシャルワーカー・事務などの多職種で構成されており、地域医療連携のさらな

る強化を図ることに重きをおいております。各診療科の診療実績や特色を明示するとともに、画像検査予約システムの簡素化や医師の直接対応による骨折ホットライン・消化器ホットラインを設置するなど、応需の改善に努めています。今後も、近隣医療機関からのご依頼に対する当院の対応や応需状況の調査、退院後の円滑な在宅医療・介護への移行に向けた支援体制整備、ホットラインの整備等を行い、地域医療連携の改善に努めて参ります。

令和3年度の紹介患者数は11,669人、逆紹介患者数は8,747人、紹介率は93.1%、逆紹介率は81.4%でした。紹介状をお持ちの患者さまの待ち時間が短くなるよう、一部の診療科では「初診時紹介予約制」を行っておりますのが、今後は診療科の特性を考慮したうえで予約の必要性の是非を含めて、より多くの患者を受け入れできるような体制を構築していきます。

地域中核病院、地域医療支援病院として皆様のお役に立てるよう、そして皆様から「選ばれる病院」となるよう、お気軽にご紹介・ご相談頂けるような診療体制を整えて参りますので、一層のご指導・ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。